



校長室だより 38号

中島 悟

【キャッチフレーズ】

未来に残そう 伝え築いた 振徳商業
目指せ 三種目 日本一 !

【来週の行事】 1月16日(月)～ 全商簿記課外、第12回閉校実行委員会
21日(金) 学校評議委員会

- 1 「創立30周年を迎えて」 4回卒 杉本正子 30周年記念誌より抜粋
2 出逢ったいい話『人間の詩より』特攻隊 『致知』2004年5月号より抜粋

「創立30周年を迎えて」(一部修正) 4回卒 杉本正子(旧姓衛藤)

今年、4月12日、私は23年ぶりに、母校である振徳商業高校の門をくぐった。なつかしさは、もちろんのことでしたが、少々てれくさい感じがしました。なぜなら、私の隣には、真新しい制服姿の息子がいっしょに、並んでいたからです。

「30周年」記念すべき入学式に、保護者席に座り、厳かに式典を終え、感無量でした。保護者席の中にちらほら当時の先輩、同級生など、なつかしい顔も見つけ、校歌斉唱の際には、小さな声ながら、一緒に歌わせてもらいました。

昭和48年4月、商業科4期生として入学。まだ新しい校舎に胸わくわくしながら、登校したことを覚えています。当時から、「あいさつ」をきびしく指導され、自転車通学だった私は、途中すれちがう在校生に「おはようございます。」「さようなら。」と、大きな声をかけまくり、声がかすれてしまうことも、しばしばでした。

3年間、女子だけのクラスで、学び、遊び、……etc」。それも遠い昔の出来事にすぎないのですが、思い出していると、“あの、茶色い制服”を着た、みんなの笑顔がついこのあいだまで一緒にいたかのように、くっきり目に浮かびます。

私は珠算部に入部していたのですが、少々さぼりぐせがあり、よく顧問の先生を困らせたものですが、なんと、その時の顧問の先生が、今の上田校長先生では、ありませんか！本当にびっくりしました。(白髪は、増えたようですが、お元気でなによりです。)私達、4期生、34HRは、ほぼ年1回、同窓会を行なっています。

今は、それぞれ違う人生を歩んでいるみんなが、その日ばかりは、学生時代に戻り、大きわぎ！一晩では、話し足りないくらい、おしゃべり、おしゃべり、尽きることなく。たまには、当時の先生方でもお呼びして、これからもずーと、みんなで協力しあいながら、続けていけたらいいなあと思っています。

私は、卒業後、地元企業へ就職し、勤続24年目を迎えました。先輩はもちろん、後輩にも、たくさん振徳商卒業生がいますが、みなさん、学生時代に学んだことを、十分に発揮され、活躍されているようで、心強い気がします。遠い記憶をたどりながら、綴ってきましたが、月日は流れても、学生時代にしかない、すばらしい思い出は、一生みんなの心に残り続けるでしょう。

同窓生みんなが、いつまでも元気でいてくれること。そして私自身も、近い将来、同じ母校を持つ息子と、高校時代の思い出でも、語れたら、幸せだと思っています。

出逢ったいい話『散っていった友の詩を語り続けて60年』

特攻隊の生き残りとして、散っていった仲間たちの思いを語り続けておられる知覧特攻平和会館顧問・板津忠正さんのインタビュー記事を抜粋して紹介します。

(記者)知覧の特攻平和会館は、来場者が引きも切らないそうですね。

(板津)いま知覧には、年間70万人の方が訪れています。人口わずか1万4,000人のあの町にですよ。景気の低迷でよその観光地はちょっと下火になっていますが、知覧は逆に伸びる一方なんです。

(記者)館内にある特攻隊員の皆さんの写真には、感極まるものがありますね。

(板津)あの笑顔を見て、皆さん感動されるんです。これから死出の旅路に立つ者が、なぜあそこまで晴れやかな笑顔を見せられるのか。以前、あれは強制的に笑わされた顔だ、という作家もいましたが、強制されてあんな笑顔になるかってことね。いよいよ出撃の直前ともなれば、各々の思いを、家族への手紙や辞世の句として残しました。私はそれらをほとんど諳（そら）んじているんですよ。あれこれ説明するよりも、そうした絶筆を直接ご紹介したほうが、出撃前の気持ちはよくわかると思います。

これは宮城県の相原ノブオ少尉、18歳が、継母である母親に宛てて書いた絶筆です。「母上、お元気ですか。長い間本当にありがとうございました。我六歳のときより、育ててくださった母。

継母とはいえ、この種の女にあるがごとき不祥事は一度たりとてなく、慈しみ育ててくだされし母。ありがたい母、尊い母。俺は幸福だった。

その母上に対して、ついに最後まで『お母さん』と呼ばざりし俺。幾度か呼ばんとしたが、なんと意志薄弱な俺だったろう。母上お許してください。さぞさびしかったでしょう。

いまこそ大声で呼ばせていただきます。お母さん、お母さん、お母さんと」この遺書を、継母であるお母さんがどんな気持ちで読まれたか、察するに余りあると思うんですね。

それから、愛知県の久野正信大尉は、全文カタカナで遺書を書かれました。

5歳と2歳の2人のお子さんがいらして、きっと一日も早く父親の心情を伝えたいと思われて、小学校低学年で習うカタカナで書かれたのでしょ。

「正憲、紀代子へ。

父ハスガタコソミエザルモ、イツデモオマエタチヲミテイル。

ヨクオカアサンノ イヒツケヲマモツテ、オカアサンニシンパイヲカケナイヨウニシナサイ。

ソシテオオキクナツタレバ、ヂブンノスキナミチニススミ、リップナニッポンデンニナルコトデス。

ヒトノオトウサンヲウラヤンデハイケマセンヨ。『マサノリ』『キヨコ』ノオトウサンハ、カミサマニナツテフタリヲヂットミテキマス。

フタリナカヨクベンキョウシテ、オカアサンノシゴトヲテツダイナサイ。

オトウサンハ『マサノリ』『キヨコ』ノオウマニハナレマセンデシタケレドモ フタリナカヨクシナサイヨ」

(記者)いまはどのようなお気持ちで語り部としてのご活動を？

(板津)旅立った特攻隊員が、ただ気がかりだったのは、自分たちが死んだ後で日本がどうなっていくのか、ということでした。

こんな辞世の句があります。

「国のため 捨てる命は 惜しからで ただ思わるる 国の行く末」

「風に散る 花の我が身は いとわねど 心にかかる 日の本の末」

私は、神社などへお参りする時は、日本の現状をずっと報告してきとるんだね。ところが最近、報告するのが心苦しい時があります。

子が親を殺したり、親が子を殺したり、非常に説明しづらいことばかりですからね。特攻隊員たちは皆、平和を望んでやまなかった。生き残った私は、彼らの語り部としてやっていく以外にその方法を思い浮かばなかったから、一途にこれをやり続けたわけです。

日本中の人を知覧へ行くようになれば、校内暴力も家庭内暴力も絶対になくなると私は思っています。ですから、少しでも多くの人に知覧に行っていたきたいというのが、私の切なる願いです。